

『フランス植民地帝国』における デュラスとインドシナ

河野美奈子

1. はじめに

1940年5月に出版された『フランス植民地帝国』(*L'Empire français*, 1940)はマルグリット・デュラス(Marguerite Duras, 1914-1996)が本名、マルグリット・ドナデュー(Marguerite Donnadicu)の名で植民地省に勤めていた時に上司フィリップ・ロック(Philippe Roques)とともに執筆した、当時のフランス植民地の紹介本である。フランスの植民地化への歴史とともに、アフリカからインド洋の島々、そして、現在の東南アジアであるインドシナの歴史と人口、経済、軍事力等を紹介している。

しかしながら、デュラスにとって最初の書物であるにもかかわらず、『フランス植民地帝国』はデュラスの著作とはされておらず、長い間無視され続けられていた。それは、デュラスが作家となる前に植民地省での一公務員として書いたものであり、後のデュラス作品に見られる植民地主義への批判的立場とは正反対のものだからである。そのためデュラス本人からも、デュラス作品の読者からも都合の悪い書物とされてきた。しかし、本当に『フランス植民地帝国』とデュラス作品は完全に切り離すことができるのだろうか。『フランス植民地帝国』のなかにデュラスの作家としての生成の片鱗を見出すことで、デュラスの文学作品、とくにインドシナを舞台にした自伝的作品との共通点を明らかにし、デュラスの複雑な感情を反映したインドシナ観に新たな側面を提示することができるのではないだろうか。

日本では、デュラスと『フランス植民地帝国』との研究は、すでに芦川智一により『愛人』(*L'Amant*, 1984)との比較考察が行われている¹⁾。しかし本稿では、『愛人』よりも前に書かれた、『太平洋の防波堤』(*Un barrage contre le Pacifique*, 1950)をもとに『フランス植民地帝国』とデュラスの文学作品との関係性を明らかにしていきたい。なぜなら、『太平洋の防波堤』は『フランス植民地帝国』が執筆された10年後に出版された最初の自伝

的作品であるため、『太平洋の防波堤』で描かれるインドシナのなかに、『フランス植民地帝国』の痕跡が生々しく残っているのではないかと考えられるからである。

それにはまず、『フランス植民地帝国』がなぜ執筆されるにいたったかを探り、デュラスの『フランス植民地帝国』に対する距離を明確にしたい。そして一連の考察を通して、『太平洋の防波堤』との比較を試みたい。

2. 『フランス植民地帝国』について

『フランス植民地帝国』は1940年5月3日から24日までシャンゼリゼのグラン・パレで開催された「第2回フランス植民地サロン²⁾」を機に出版された。3枚の地図を付した全5章からなる本書は、当時の植民地がフランスにとっていかに重要であるかが述べられている前文のあと、第1章では、フランスがどのようにして植民地を拡大し、植民地帝国を完成させていったのかが書かれている。植民地の変遷とナポレオン戦争後の新たな植民地拡大、そしてアルジェリアの植民地化によりフランスの植民地政策が勢いに乗ったことで、19世紀末に植民地化が一定の完成を見たその50年後、つまり本書が書かれた時点でのフランスの植民地の現在が紹介されている。

第2章では、5つの大陸にまたがったフランスの植民地のなかでも、船の寄港地という点から重要視されたアフリカ、マダガスカルそしてインドシナが取り上げられ、各々の自然、主要都市、人種が紹介されている。そしてそれらの植民地の中継地点としての重要性について述べられた第4項のあと、全ての植民地がフランスとだけでなく、植民地同士もつながっていることが書かれた第5項目へと続く。

第3章の植民地における軍事力では、入植者の数や、フランスの有事の際に、どれくらいの間人を招集できるかなど軍事的な面からの植民地の重要性が書かれており、さらに第4章では、ゴム産業や米、カカオや砂糖といった農作物、そして鉱業などがそれぞれの植民地でどれだけとれるのかが紹介されている。最後の第5章は、フランスの植民地政策の最も大きな動機付けとされた「文明化」が挙げられており、植民地でのフランスによる医療、教育、法整備への貢献が記されている。

『フランス植民地帝国』は当時のフランス植民地帝国を礼賛する植民地カタログである。しかしその目的は、帝国意識が最も高揚していた時代に、フランスが文明の頂点にいることの素晴らしさを誇示し、未発達植

民地を対比させた、1931年の「パリ万国植民地博覧会」当時のフランス政府の目的とは異なっている。

1931年5月6日から11月5日まで開催された「パリ万国植民地博覧会」の目的は、植民地とヨーロッパが協力して植民地世界の秩序を保っていく政策を啓蒙するため、ヨーロッパの連帯を呼びかけるものであった。第1次世界大戦前のヨーロッパと植民地の関係は、圧倒的優位に立つ白人を頂点に複雑な人種のピラミッド構造になっていたが、宗主国のために戦争に強制的に参加させられたことにより、植民地でも民族運動が高まり、白人とその他の人種という二項対立の図式になってしまった。そのため、ヨーロッパの国々が集結する「パリ万国植民地博覧会」は、ヨーロッパの連帯を呼びかけるにはうってつけの機会となったのである。

博覧会の総責任者のリヨテ元帥（Hubert Lyautey, 1854-1934）も「パリ万国植民地博覧会」の広告に次のように書いている。

植民地の征服の目的は、敵を破滅させるのではなく、惹きつけることでなければならぬ。また植民地に入り込む目的は、「現住民」を排除することでも同化するでもない。その目的は、近代的装備を与えて、彼らと「協同する」ことである³⁾。

このように植民地は依然としてエグゾティズムを誘う土地であり、そこに住む人間は「文明化」の対象ではあったが、第1次世界大戦を経験したあとの1931年に開催された「パリ万国植民地博覧会」では、植民地と協力しながら、他のヨーロッパ各国とともに、いかに帝国主義を維持していくかに問題の焦点があてられたのである。

しかしながら、第2次世界大戦が始まる1939年になるとフランスを取り巻く世界状況は変化し、「第2回フランス植民地サロン」における植民地は、戦争における重要な拠点に変化する。「第2回フランス植民地サロン」を特集した週間新聞『イリュストラシオン』(*L'illustration*)の1940年5月に発行された号において、当時の通産大臣であり、フランス植民地サロン(Le Salon de la France d'outre-mer)会長でもある、ルイ・ロラン(Louis Rollin, 1879-1952)が、「この第2回植民地サロンは戦争の状況から特殊な性質を請け負っているのは明白である⁴⁾」と述べている通り、「パリ万国植民地博覧会」とは異なった目的をもっているのである。

そのため、「パリ万国植民地博覧会」ではヨーロッパと植民地の差異を

明確化させ、「文明化」の正当性をあらためて内外に知らせるとともに、各パビリオンでは、それぞれの植民地の特徴を用いた建築がなされ、荘厳なアンコールワットはフランス市民を視覚的にも満足させたのに対して、グラン・パレで行われた「第2回フランス植民地サロン」では、工芸品の展示は僅かばかりで、軍事省による植民地における武器や植民地部隊の旗、軍服を着た現地民が各々の国を表した世界地図がメインとなって陳列されている。「パリ万国植民地博覧会」との唯一の共通点は、現在パリ12区のインドシナ戦没者公園に置かれているアテナ像が、グラン・パレの身廊に置かれているということだけである。

ロランの言っている戦争とは、前年に開戦した第2次世界大戦でありそのことは『フランス植民地帝国』でも強く意識されている。『フランス植民地帝国』の前文に、サロンの開催と『フランス植民地帝国』刊行の目的が明白に書かれている。

ところで、本書は大変重要なこの使命に協力することを目的としている。読むことにより以下の確信を持っていただきたい。つまり、帝国は成された。戦争が帝国を完成させたということである。これまでは、それが多くの場合議論のテーマにしかなくてなかったが、今やドイツの脅威と民族主義の教義が、決定的な現実になったということ意識させている⁵⁾。

1939年9月、ドイツのポーランド侵攻により始まった第2次世界大戦において、1940年5月フランス北部から侵攻したドイツ軍が、ものの1ヶ月でパリを占領する。6月22日にフランスが早々にドイツと休戦協定を結んだことで、フランス全土のほぼ6割がドイツ占領下となった。

フランスとドイツは20世紀初頭にすでに「モロッコ事件⁶⁾」を経験しており、これを契機として、ドイツによる侵略の脅威にさらされたフランス国民のあいだに、帝国意識が高まったと考えられている。また、それまでは敵国としていた大英帝国と事件以後共闘関係になる。

ロランも『イリュストラシオン』において、「第2回フランス植民地サロン」に当時の英国植民地省大臣、マルコム・マクドナルド(Malcom MacDonald, 1901-1981)が来訪したことに謝辞を述べ、今後2つの帝国であるフランスとイギリスの関係はより強固なものになるであろうと述べていることから、ドイツを敵と見なしていることがわかるだろう。『フランス植民地帝国』においても、「ドイツは自然による深刻な障害がないの

で、容易に中央ヨーロッパへと移動することができ、今後も植民地となる運命を辿ることはないだろう⁷⁾。」と書かれており、当時のフランスがドイツに対していかに警戒感をいだいていたのかがうかがえる。

『フランス植民地帝国』の執筆と、「第2回フランス植民地サロン」はそのような状況下で製作、開催された。ドイツへの対抗策として、植民地を重要な拠点と考えたフランスは、いま一度植民地における宗主国フランスの貢献度の高さと、植民地の軍事的重要性を国内に示す必要があったのである。

この点について強調しても、し過ぎることはないだろう。つまり、これこれの植民地とかこれこれの植民地集団というものが存在するわけではないのだ。使い古された言葉を使えば、「一にして不可分の」フランス帝国が存在するだけなのである⁸⁾。

『フランス植民地帝国』の前文においても強調されている通り、ドイツに抵抗するためフランスと植民地の連携をより強固なものにしようとする意思がうかがえる。そのために、「一にして不可分の」というフランス革命以来の共和国の理念を掲げることにより、フランス国民のなかに植民地との「共闘」の意識を芽生えさせることを促した。

フランスがドイツの占領下に入ったのちに、ドイツはヴィシー政権を誕生させるが、フランスに対する懐柔策の1つとして、植民地の統治権をヴィシー政権に残しておく。そのヴィシー政権は、イギリスの後ろ盾をもった将軍シャルル・ド・ゴール率いる「自由フランス」と植民地の取り合いを繰り返すのである。植民地はこのようにして大戦下で重要な切り札となり、各植民地の住民の意思とは関係なく、大国間の戦力争いに巻き込まれていった。そして、『フランス植民地帝国』は第2次世界大戦の始まりにあって、ドイツからの脅威におびえる混沌としたフランスのなかで作成されたのである。

では、デュラスはどのようにして『フランス植民地帝国』執筆に関わっていったのだろうか。植民地、とくにインドシナは彼女が生まれた地であり、バカロレアの試験に合格後、18歳で完全帰国するまで過ごした土地である。彼女がフランス人でありながら、家族の悲劇によって、宗主国の人間としての十分な恩恵を受けられなかった事実は、インドシナを舞台とした彼女の自伝的作品のなかで描かれている。また、デュラス作品のなか

で重要なテーマとして挙げられているのが、植民地主義批判であり、その批判精神はインドシナを舞台にした作品以外にも流れている。デュラスは、『エデン・シネマ』(L'Eden Cinéma, 1977)のなかで、賄賂を払わなかった母親に耕作不能地を売った役人に対して、「わたしたちは皆同じ人間なのだから、同じように死ぬからには、その不正行為に殺されるのは、今度はあなたの番でしょう⁹⁾」と植民地でその不正を告発している。

にもかかわらず、なぜデュラスは植民地省の職に就き、『フランス植民地帝国』を執筆したのだろうか。その問いに答えるために、まず、デュラスが植民地省に勤めることになった経緯から探っていきたい。

3. 『フランス植民地帝国』とデュラス

1937年6月に植民地省で働き始めたデュラスは、植民地間情報資料課(Service intercolonial d'information et de documentation)に配属となった。フランス・バナナ宣伝委員会(Comité de propagande de la banane française)で6ヶ月間勤務したのち、1939年6月から、『フランス植民地帝国』を製作するため、「出版部門の契約職員(attaché contractuel de presse)」として上司フィリップ・ロックとともに、当時の植民地省の大臣ジョルジュ・マンデル(Georges Mandel, 1885-1944)の命のもと、デュラスは『フランス植民地帝国』執筆にとりかかるのである¹⁰⁾。

なぜデュラスは1937年の冬に出来たばかりの植民地間情報資料課の求人を見つけ、働くようになったのだろうか。植民地の役人は彼女の母親の憎むべき相手¹¹⁾であり、『太平洋の防波堤』での痛烈な植民地主義批判を考えると、違和感を感じざるをえない。デュラス自身も、植民地省で働いたことを次のように述べている。

私が編集者として植民地省に入った日、それは私の青春時代で最も重要な日だった。私は突然気づいてしまったの。映画じゃ教えてくれなかったことよ。それは、人生は常に素晴らしいというわけではないということ。でも、おそらく必要不可欠なの。(…)私は植民地で働いた…。いいかえれば、くそつたれの植民地に戻ったということよ…¹²⁾。

間接的にでも、植民地政策の中枢機関で働いたことは、彼女にとっては都合の悪い経歴であったことは容易に想像できる。そのため、彼女は『フランス植民地帝国』について積極的に話すことも、作品の中で描くことも

なかったのである。

1930年代のフランスは、女性の社会進出が積極的に行われる時代の直前であり、社会ではまだ女性は家庭でおとなしくいることがよしとされていた。1937年デュラスは政治経済と法律の学位を取り終えたばかりであり、実用的な職歴はほとんどなかった。それにもかかわらず、彼女は3月に求人を見つけるやいなや、6月には働き始めている。

そこにはデュラスの家族が大きく関わっていることが考えられる。デュラスの就職に際して家族が直接的に関係していた証拠はない。しかし、デュラスの自伝を書いたジャン・ヴァリエ (Jean Vallier, *C'était Marguerite Duras*, 2006) は、インドシナの植民地学校の校長、アンリ・グルドン (Henri Gourdon) がデュラスの就職に際して何らかの力添えをしたのではないかと示唆している¹³⁾。デュラスの父、アンリ・ドナデュー (Henri Donnadiou) を高く評価していたグルドンは、ベトナム中部のザーディン (Giadinh) の師範学校で働いていた彼を引き抜き、カンボジアの学校の教師に推薦した。そして、1937年当時、グルドンは植民地省に出来たその新しい課に直接関わりのある、インドシナの経済機関の所長に任命されていた。

また、デュラスの母親は払い下げ地の売買について以下の手紙を政府高官へ送っている。

また付け加えて申しますと、私は1人の善良な公務員の未亡人です。私の夫、ドナデューは、3人の子供 (19歳、18歳、そして15歳になります。)を残して逝きました。この払い下げ地を望んでいるのはまさにこの子供のためなのです。私は24年前から公務員として働いていますが、いかなる援助も受けてきませんでした。私の使命はとても重いです。どうか高官殿、この払い下げ地を与えていただけるならば、子供達の将来を心配することもなくなるでしょう¹⁴⁾。

母親はこの手紙以外にも度々政府へ請願の手紙を出している。デュラスが植民地省に就職したことは、母親にとって植民地での功績が認められたことを意味していたのではないだろうか。デュラスがフランスへ帰国した後も、母親はデュラスをインドシナ連邦政府や植民地省との連絡役に行っていることもあり、デュラスはフランスへ帰っても、移民の家族として、植民地からも母親からも離れることができないでいたのである。インドシナでのデュラスの家族、特に母親の悲劇は、『太平洋の防波堤』、『愛人』、『北の愛人』 (*L'Amant de la Chine du Nord*, Gallimard, 1991) にも描かれてい

る。夫の死や耕作不可能な土地を購入したことによる家計の貧窮により母親が狂気にかられる姿は、デュラスの植民地に対する思いを一層複雑化させたのだ。植民地省で働くことは、デュラスにとって、家族が政府に忠誠を示す最後の仕事であったと考えることができる。

しかしながら、自ら進んでではないにしても、『フランス植民地帝国』の執筆はデュラスの作家としての出発に大きく関わるものとなった¹⁵⁾。1941年のガストン・ガリマル（Gaston Gallimard, 1881-1975）への手紙にデュラスは次のように書いている。

あなたのところで『フランス植民地帝国』という本を去年連名で出したので、私の名前を全くご存知ではないということはないかとは思いますが。しかし私が今日あなたに委ねる原稿『タヌラン一家』は、『フランス植民地帝国』とは全く関係がありません。あの本は依頼されて書いただけなのです¹⁶⁾。

『タヌラン一家』は後にタイトルを変え、デビュー作『あつかましき人々』（*Les Impudents*, 1943¹⁷⁾）として出版される。デュラスは、『タヌラン一家』を出版するために、ガストン・ガリマルへ送った原稿の評価を催促する手紙を数通書いているが、最終的にはガリマルにより、今は出すべきものではないとの判断を下されてしまう。いずれにしても、後にいくつもの作品をガリマル社から出版したことを考えると、『フランス植民地帝国』の執筆が何らかの意味で作家としての出発点となっていたことは否めない。

役人への嫌悪と同時にまじめに働く貧しい公務員への同情という複雑な思いが、デュラスのなかで常に揺れ動き、その後のデュラスの創作活動のなかでもこの両義的な感情は様々に形を変えて続いていく。

デュラスは『フランス植民地帝国』執筆のために植民地省の出版部門に1939年6月に配属され、翌年の2月から3月の間に本は書き上げられた。その時期、彼女はロベール・アンテルム（Robert Antelme, 1917-1990）と結婚する。ユダヤ人作家であったアンテルムはデュラスをレジスタンス運動の世界へと導くことになる。1944年にアンテルムが捕まり強制収容所に連行されると、デュラスは彼を待つ苦しみの日々を日記に綴り、後に『苦悩』（*La Douleur*, 1985）として発表する。

1930年代後半から1940年代にかけては、デュラスにとっても常に揺り動かされる時代だった。女性の就職が難しい戦前、戦中時代だった、と

いうだけではなく、自身の生き立ちや家族の影響もあり、植民地省への就職と『フランス植民地帝国』の執筆はデュラスのなかで複雑化された妥協だったと考えられる。しかしその「書く」という行為により、彼女は作家としての才能に目覚める。ガリマール社とのコンタクトは彼女の作家人生の初めに大きな勢いをつけたと考えられる。その後、レジスタンス運動、5月革命参加を通し、彼女は「書く」行為によって戦う方法を見つけたのではないだろうか。週刊紙、『ロートル・ジュルナル』(*L'autre journal*)の1986年第5号で、当時のベトナム首相、ファン・ヴァン・ドン(Pham Van Dong, 1906-2000)にあててベトナム反体制派知識人グエン・シ・テ¹⁸⁾(Nguyen Sy Te)の釈放願いを請う手紙を載せていることから、デュラスが書くことで権力と戦おうとしていることがわかる。

また、『フランス植民地帝国』はデュラスの作家としての単なる出発点というだけではなく、そこにはインドシナに関して後に繰り広げられる重要なイメージがすでにちりばめられている。実際に『フランス植民地帝国』のインドシナの項目とデュラスの文学作品『太平洋の防波堤』を照らし合わせてみたい。

4. 『太平洋の防波堤』から見る『フランス植民地帝国』

『フランス植民地帝国』では、インドシナの項目第2章の第3項において、「インドシナ、民族の交差点(L'Indochine, carrefour des peuples)」としてまとめられている。文末の地図(図版1)にもあるようにインドシナ半島を中心に、アンナン人、カンボジア人、ラオス人そのほかの様々な少数民族が紹介され、インドシナの自然と街の特徴が述べられている。「インドシナは植民地のなかで最も美しいと言える。いずれにしても、我々の帝国の中で最も大きな街があるのだ¹⁹⁾」と述べられ、その恵まれた自然と特有の文化により、すでに観光地として多くの人が訪れており、植民地の成功例として紹介されている。インドシナのエリート層²⁰⁾の知識の高さは、インドシナ連邦にとって大きな力となるとともに、その能力の高さゆえに、彼らは植民地政策にとって、今後1つの憂慮すべき問題にもなりうると思われる。

『フランス植民地帝国』において、デュラスがどの部分を担当していたかはわからない。しかし、ジョエル・パジェス＝パンドンは、IMEC (l'Institut Mémoires de l'édition contemporaine) で見つけた資料を調査することにより、マルグリッド・ドナデューが長きにわたって、『フランス植民地帝国』

の編纂に携わっていたことを確認した。とくに、デュラスが草稿を手書きした《ページ色のノート》のなかにベトナム北部のトンキンを描写した1枚が、コピーライトされた形となつてはさまれていることから、インドシナの項目に彼女が深く関与していたことが推測される²¹⁾。また、芦川智一は「ドナデュラスが草稿を執筆し、ロックが修正を加える形ですすめたようだ²²⁾」と指摘している。

『フランス植民地帝国』におけるインドシナの項目では、後のデュラス作品との共通点を見出すことができる。

1) 『フランス植民地帝国』と『太平洋の防波堤』における自然の描写

『太平洋の防波堤』が世に出たのは、『フランス植民地帝国』が出版された10年後の1950年であるが、後に「流れる文体 (L'écriture courante)」としての彼女の独自の文体を確立する前であるため、アジア大陸の言葉を多用した説明的な描写や、山脈と海の関係性などに共通点を見いだすことができる。とくにアジア大陸の自然や気候を細かく描写し、印象的に描いていることは注目すべき点である。インドシナの自然こそがデュラスのインドシナを舞台にした作品の特徴の1つとも言えるからである。

そこで、本章ではまず、自然の描写に着目してみたい。『フランス植民地帝国』ではインドシナの地形は次のように描写されている。

はるか彼方には太平洋が広がる、シナ海の中央にあるという素晴らしい位置関係により、インドシナは大洋州の島々の生活も分ちあっている。つまり、島の生活様式も持っともいるが、気候や奥行きのある陸地により、アジアの生活様式も備えているのである。インドシナはアジアの端であるといえるだろう。実際、インドシナ半島の大部分をフランス領で占めてはいるが、その横にはシャムがあり、ビルマがあり、マレー連合州があるのだ。インドシナ半島は、アジア大陸の起伏に富み、広域にわたる地形の変化によって、主要な山の稜線において明確にされているのである。そしてその変化はアジアを中央に持ち上げ、山塊の凹凸を緩やかにし、広い谷をあらわにし、とうとう大河の川底をより深くし、流れの速さを早めたのだ²³⁾。

海からアジアの大陸に入り込む描写は『太平洋の防波堤』でも次のように描かれている。

一方をシナ海で囲まれ——母はそれさえも頑固に太平洋と呼んだ、彼女の目には《シナ海》は田舎臭く、若い彼女が夢を託したのは、太平洋であって、いたずらに物事を複雑にする小さな海ではないからだ——東の方は、アジア大陸の高地から沿岸に沿って伸び、曲線をえがきながらシヤム湾に至って、そこでいったん海中に隠れ、だんだんと小さくなってゆくがどれも一律に熱帯の薄暗い密林に覆われた多数の島となって再び現れる長い山脈に覆われた、カムの沼地の多い平野に住む子供たちが死ぬのは、事実、虎ではなく飢えによってであって、飢えからの病気、飢えからの冒険であった²⁴⁾。

完全な一致とは言えないまでも、「太平洋」と「シナ海」、さらに「シナ海」にある島々について説明的に記述されたこの部分には『フランス植民地帝国』からの強い影響が感じとれる。『太平洋の防波堤』以降のインドシナ連作ではこれらの土地がここまで説明的に描写されることはない。

同じ大洋にもかかわらず、「太平洋」と「シナ海」は地理的には明確に区別される。これは、国境を明確にする上では重要であり、海に面した国によっては名称も分かれ、時にはそれが国家間の対立の要因ともなりうる。『太平洋の防波堤』のなかでも、「いたずらに物事を複雑にする」「シナ海」をシュザンヌの母親は田舎臭いと嫌い、執拗に「太平洋」と呼ぶのである。それは単に母親がアジアの極東と呼ばれる場所で戦っていたのではなく、「太平洋」という名の大洋、もっと巨大な相手と戦っていたことを示すためではないのだろうか。「太平洋のありふれた波の容赦のない襲来²⁵⁾」による圧倒的な自然の破壊力によって無残にも長年の夢と貯金を流してしまう大洋は、より普遍的なものへと変化し、後のデュラス作品の中で観念的なイマージュへと変化していく。

「インドシナ、民族の交差点」の項目内において、約3分の1をインドシナの自然についての説明に割かれていることからわかるように、インドシナの自然の特異性は当時のフランスにとって大いなる関心の対象であった。デュラスのインドシナを舞台にした作品においても、自然はインドシナを表すものとして重要な要素となる。とくに『太平洋の防波堤』では、自然はインドシナで生まれた子供達とフランスからやって来た母親を隔てるものとして描かれている。

『太平洋の防波堤』では自然はインドシナの子供とつながる。インドシナの平原に広がる無数の子供達は、自然の仲間であり、まだ熟していないマンゴーの実を食べてコレラで死ぬこともあるが、また生まれ、平原へと

広がっていく。まさに自然はインドシナそのものであり、自然と結び付けられた子供達はそのままだインドシナを表している。シュザンヌとジョゼフも川で子供達と遊ぶことで、現地の子供達と同質の存在として描かれ、白人社会とは隔離されている。このような状況は、デュラス自身の体験から生み出されたのである²⁶⁾。フランス生まれの母親は決して川に入らず、シュザンヌとジョゼフが川に入っている時は、彼らに近づかないことから、川は境界線としての役割を担っている。

さらに川だけではなく森も境界線としての機能を果たしている。『太平洋の防波堤』では、後のデュラス作品の様々な場面で登場するカルカッタの女乞食が誕生する。『太平洋の防波堤』の草稿において、死んでもすぐに生まれてくる子供達を、貧しい母親がもてあまして捨てたり、あるいは親の方が死んでしまい孤児になった子供をシュザンヌの母親が引き取っている。その女乞食や子供達が寝る場所が森であった。デュラスはインタビューの中で、インドシナの森について以下のように語っている。

そこで生まれたわたしたちは、森がこわくなかった。でも、フランス生まれでヨーロッパ人だった母は、森をこわがっていたの。私の母は、世界の北側の生まれだった。実際のところ、母は森を恐れていたわけじゃない。母が恐れていたのは、あの異国の地、大人になってから知ったあの熱帯地方だったのよ²⁷⁾。

未知のものは恐怖の対象となる敵とみなされる。アンドレ・マルロー(André Malraux, 1901-1976)は、『王道』(*La voie royale*, 1930)の中で、カンボジアの密林とそこに住む部族を危険なものとして書いている。

「現地にとどまることの危険だよ。」

「モイ族ですか？」

「連中と密林とマラリア」だよ²⁸⁾。

『王道』のなかに現れるような、遺跡に蛇のように絡み付く大樹や高温多湿な密林という熱帯地方特有の森は、ヨーロッパから来た者にとってはまさに脅威であった。フランスから来たシュザンヌの母親も、インドシナの森は未知の存在であり拒絶の対象である。彼女がインドシナにいるのは、より豊かな生活をするためであり、教育者としての役目を果たすことである。決してインドシナの生活に溶け込もうとしているわけではない。

たとえどれだけインドシナで暮らしても、彼女はインドシナと同化しようという考えはなかった。よって森は常に未知のものであり、自身の故郷とは異なる森は、理解不能な地であった。同様の理由で「シナ海」という呼称も拒否するのである。『太平洋の防波堤』では、マンゴーなどの食べ物と同じように、森は母親と子供達や女乞食との間を隔てるもの、フランスとインドシナのまさに境界線に位置づけられる。

また大河についても言及しておかなくてはならない。『太平洋の防波堤』では、満潮のときに川から上ってくる塩水によって耕作地の稲は台無しにされる。川ないし大河はデュラス作品の様々な場所にとって重要な要素となって描かれている。

『フランス植民地帝国』においても、インドシナの大河の説明はとくに詳細に記されている。それは、「Les fleuves et le climat」の項目が、他の植民地では、1ページほどの「le climat」だけに留めているのに対して、4ページにわたり詳細に描かれていることからわかる。これはインドシナには、メコン河と紅河という重要な大河が横断していることが大きな理由である。しかし、メコン河を現地民が「水の王 (Souverain des Eaux)」と呼んでいることや、秋になると発生するメコン河の流れの変化をプノンペンでは「水の祭 (fête des eaux)」と呼び、毎年祝っていることを紹介している点は注目すべきである。自然現象だけではなく、現地の風土も交えた記述からも、『フランス植民地帝国』の著者がインドシナのこの2つの大河を重要視していると考えられる。

デュラス作品における大河の描写として最も重要なのが、デュラス自身も「絶対的なイメージ (l'image absolue)」としている、メコン河を渡し船で横断する場面である。

わたしはよくあのイメージについて考える、いまでもわたしの目に映るイメージ。その話をしたことは今まで一度もなかった。いつもそれは同じ沈黙の中にあり、わたしをはっとさせる。それは自分のいろいろなイメージのなかでも気に入っている。これがわたしとわかるイメージ、わたしを魅了するイメージ²⁹⁾。

この渡し船のイメージはメコン河という、大きく、ゆっくりと流れる異国の河という単純なイメージから離れて、他のデュラス作品へも流れていくのである。このようにして、『愛人』が出版された1984年から遡

って、44年前に「書く」ことによって、デュラスとメコン河との対峙が成された。そして44年の歳月のなかで作家の「同じ沈黙」のうちで何度も反芻され、より観念的なイマージュへと変化し、『愛人』のなかで昇華されたと考えられる。以上のように『フランス植民地帝国』と『太平洋の防波堤』における共通点は、インドシナの自然を通して見出すことができる。しかし、この2作の間にあるのは単なる描写の共通点や、自然を重要な要素として捉えるだけではない。それは『太平洋の防波堤』における痛烈な植民地主義批判である。

2) 植民地主義批判としての『太平洋の防波堤』

大河の項目では、河口の様子も記されている。『太平洋の防波堤』では、母親が買った土地は、海の満ち潮に合わせて、「直撃するか、または根に浸透しすべてを痛めてしまうには十分な高さ³⁰⁾」に塩水が上ってきてしまう耕作不能の土地であったが、『フランス植民地帝国』では、以下のように正反対の説明をしている。

河の表面から数センチメートルにある海の塩は、生育途中の稲の根に入り、すぐに痛めてしまう。しかし、海から離れられない土地でも、年々耕作可能となっている。あと数年後には、それらの土地も完全に耕作可能な土地になるだろう³¹⁾。

しかし、実際には母親の土地で作物が育つことはなかった。デュラスは実体験の上では、正反対のことを書いたのである。『フランス植民地帝国』の執筆経験をデュラスがあまり語らなかったのは、自身のトラウマとも言うべき経験さえも植民地政策のためにねじ曲げ、フランスへ帰ったあともその傷痕を痛めつけられたことも要因の1つと考えられるだろう。

デュラスが自伝的作品ともなる『太平洋の防波堤』を書くにあたり、『フランス植民地帝国』を書いたことへの責任を取らなければならないだろうか。なぜなら耕作不能地以外にも『太平洋の防波堤』では、『フランス植民地帝国』では褒め称えられた植民地におけるフランスの事業を非難する描写が見れるからである。

まず、ゴム生産が挙げられる。『フランス植民地帝国』の第4章の産業の項目において、インドシナの主要な産業として挙げられていたゴム生産は、「セイロン島、マレーシアと同様に、インドシナでも、農園面積が

1910年の500,000ヘクタールから20年後の1930年には5倍の2,500,000ヘクタールにまで広がった³²⁾とし、フランスにおける重要な外貨獲得手段とされた。

しかし、華々しい成果を上げたゴム生産も『太平洋の防波堤』では、次のように批判的に語られている。

まさに植民地全盛の時代だった。何十万という現地人が、十万ヘクタールにもおよぶ赤土に生えている木に刻み目をつけて樹液をとるために、彼らは自分の血を採取されていた。(中略)血はむだにながれてゆくだけだ。いつかは群衆が立ち上がって流した血の代価を問う日が訪れる、などということはまだ考えるのを避けていた時代なのだ³³⁾。

ゴムの採取はまさに現地人を搾取している。白人農園主が暴力的に現地民から土地を奪い、本来なら彼らが受けるべき土地の恩恵を横取りしているのにも気づかないでいることの残酷さを、流れるゴムの樹液を現地民の血と形容することによって告発している。これほどまでに生々しく、直接的に植民地でのフランス人の暴力性を表している描写は、他の自伝的作品の中では見られない。『太平洋の防波堤』が執筆された時期は1943年から1949年の間であり、その時期はちょうどインドシナが独立を求めて立ち上がった第1次インドシナ戦争(1946-1954)と重なる。1932年にフランスへ帰国し、1940年に『フランス植民地帝国』を出版したデュラスにとっても、植民地の記憶がまだ鮮明に残っていた時代ではないだろうか。そのため、『太平洋の防波堤』には他の作品とは一線を画す明白な植民地批判がこめられていたのである。

植民地政策にはもう1つ重要な事業がある。それは交通網の整備である。インドシナでも道路が作られ、鉄道も建設された。フランス人はそれも「文明化」の1つとして挙げ、フランスによる恩恵とみなした。しかし、この事業もやはり現地民の犠牲を伴うものだった。ジャーナリストのアルベール・ロンドル(1884-1932)は、1928年に取材のために訪れたセネガルとフランス領コンゴで、奴隷制度はすでに廃止されているにもかかわらず、鉄道建設と開発のためにおびただしい数のアフリカ人労働者が酷使されている実態を「くそつたれのアフリカ!」とある旅行雑誌³⁴⁾で告発している。『太平洋の防波堤』でも、カンボジアのプロンベンから200km離れたラムという町に住んでいる主人公一家にとって自動車は必要不可欠で

あり、「道」の描写はたびたび作品の中に登場する。

道路はこの狭い平原を突っ切っていた。建前としては平原の将来の資源をラムまで吸い上げるために作られたのだが、平原はあまりに貧しく、常に飢えにむけて開かれているバラ色の口をした子供達以外の資源はほとんどなかった。したがって道路は事実上、そこを通り過ぎてゆくだけのハンターたちと、そこに集まって、腹をすかして遊び戯れる猟犬の群れと化す子供たち——飢えは子供たちが遊ぶことを妨げない——の役にしかたたなかった³⁵⁾。

白人たちはこの事態に満足しているわけではない。子供たちは車の通行の邪魔になり、橋はいためるし、道路の石ははがすし、それに良心の呵責という問題まで引き起こしてくれる。子供の死者が多すぎると白人たちは言う³⁶⁾。

自動車を通すために整備された道は資源の乏しい平野では無益であり、子供の遊び場と化していた。だが道路で遊ぶ子供達は「自動車の往来にとっての癌」とされ、たびたび子供が轢かれるが、白人たちは賠償金を払うだけで立ち去ってしまう（あるいは、親が近くにいない場合はそのまま通り過ぎる）。また、主人公の母親にとって唯一の召使いである、「伍長」のラムにおける道路造成の仕事も、道路の描写として注目すべきものである。耳の聞こえない彼は、重罪を犯した囚人達とともに、灼熱の太陽のもと1日16時間にも及ぶ重労働をさせられる。そしてやっと出来上がった道路も、無意味になるか、あるいは白人たちが子供を轢いていく道路となるのである。ところが『フランス植民地帝国』では反対に、植民地における宗主国の貢献として道路整備をあげ、熱意をもって道路工事に取り組む現地人が記されている。『フランス植民地帝国』での道路建設への賞賛と比較して、『太平洋の防波堤』での道の無意味さは植民地主義への毅然とした批判と読み取ることができるだろう。

デュラスの『太平洋の防波堤』での植民地に対する告発は、母親の土地管理局長への手紙に集約されている。その手紙は息子ジョゼフとの永遠の別れの直前、唐突に小説のなかに現れる。彼の言葉に従って母親が書いたものとなっており、母親に唯一残された耕作可能な土地を永久払い下げ地として認めてもらうように頼むものだった。その手紙のなかで、母親は自分のすべてを犠牲にしていかにお金を貯めたか、その金がカムの土地管理局の役人による不正行為で無駄になったことを告発している。彼女は耕作

不能地だとは知らずにやってきた入植者に、塩にまみれた土地の土を舂めさせて稲が本当に育つか問うと述べ、役人達は、いつか道路建設に従事した囚人達が生き埋めにされた道路の溝に同じように横たわるだろう、と警告している。さらに、役人がそれでも不正行為を続けるならと以下のように宣言するのである。

私はこの卑劣な行為に慣れることはありません。私が生きている限り、ことされるまで、いつまでもあなたにこの件について語り続け、あなたが私にしたこと、わたし以外の他の人々に毎日したこと、しかもそれが落ち着きまい、名声を受けながら行ったことを詳細に語り続けてまいります³⁷⁾。

この母親の宣言はデュラス自身の宣言として捉えることができる。一度は役人として植民地政策に加担してしまったデュラスが、『太平洋の防波堤』のなかで植民地における役人による犯罪を告発し、『フランス植民地帝国』とは正反対の事実を明らかにすることにより責任をとろうと考えたのである。デュラスは自分の立場を説明する場合、常に植民地の労働者達の立場から出発するという方法をとっていた。それは植民地のフランス人の最下層で生活していたという自身の生い立ちに深く関係しているのは明白ではあるが、さらに『フランス植民地帝国』を執筆したことにより、支配する側での嫌悪感に目覚めたのではないだろうか。そのため、『フランス植民地帝国』において礼賛されたゴム生産、道路事業を『太平洋の防波堤』では抑圧されている側から描き、母親の手紙によって植民地における不正ひいては、植民地主義と戦う宣言をしたのである。

5. おわりに

『フランス植民地帝国』はプロパガンダ書物であるため、デュラス自身の作品に数えるには無理がある。しかし、デュラスがまだ作家になる前に初めて執筆したこの書物と、彼女の後の作品とのあいだには多くの共通点を見出すこともでき、作家デュラスに関する資料としては大変興味深いものである。

『フランス植民地帝国』の執筆が計画された時は、まさにドイツ軍が目前に迫り、国内はドイツの脅威により混沌とした状況にあった。19世紀から20世紀初頭までしきりに叫ばれた植民地を「文明化」する大義も使い古された文言となり、1931年の「パリ植民地博覧会」のようにヨーロ

ツパ諸国とともに各植民地と「協同」し、いかに植民地政策を維持していくかに重きをおける時代ではなくなっていた。植民地の認識は時代とともに変容したのである。『フランス植民地帝国』が出版され、それにともなって「第2回植民地サロン」が開催された1940年5月は、ドイツがフランスへ侵攻を始めた時期である。そのような時に刊行された『フランス植民地帝国』の目的は、敵国ドイツに立ち向かい、フランスと植民地を維持していくには、植民地の人間もフランス国民としてともに戦う必要があることを確認することだった。しかし、それでも従属関係は続き、植民地の人間の意向が汲み取られることはなかった。『フランス植民地帝国』はフランス本国の国民に向けられて書かれたのである。

インドシナで生まれたデュラスは、彼女の不遇な子供時代が関係し、現地の子供と同じように育ち、支配階級の白人とは異なる植民地生活を送った。そのため、植民地に対して複雑な思いを抱き、とくに理不尽な役人や役人の不正には憎しみさえ抱いていた。そのような彼女が後に植民地省で働き、植民地を礼賛する書物を書いたという事実は、多くの謎を残した。しかし、女性が働きづらい時代、まして異国から帰って大学を出たばかりのデュラスが必死に職を探していたことは想像に難くない。そのうえ、かつてインドシナで必死に働いた両親の存在が、デュラスの植民地に対する感情とその表現を複雑にするのである。

『フランス植民地帝国』を執筆することは、かつて植民地で苦しんだデュラスにとって嫌悪感を抱かせるものだったため、デュラスは長い間自ら進んで話そうとはしなかった。

しかし、「書くこと」という天職を見つけたデュラスは、はからずも『フランス植民地帝国』執筆により作家としての道を切り開くことになる。植民地批判精神を持ちながら、植民地省で働き、行政に勤めていることを利用してレジスタンス運動に身を投じるというアンビヴァレントな意志は後のデュラス作品に受け継がれていく。

『太平洋の防波堤』の中に見出すことのできる『フランス植民地帝国』の痕跡は単なる描写の類似性だけではない。そこに植民地主義へ明白な批判を組み入れることで、『フランス植民地帝国』執筆に対する責任を取ったと考えられる。また、この2冊には後のデュラスがイマージュへと転化させ他の作品へと通底させる重要な要素である森や大河、海や熱帯の気候が組み込まれている。デュラスは一つの街を作り上げる場合、4つか5つの要素を取り出して、独自の世界を作り上げる³⁸⁾。そうして出来たカ

ルカッタやヒロシマは、観念的な街として作品の中で動き出す。そのため、『太平洋の防波堤』だけでなく、他のインドシナを舞台にした作品、さらには自伝的作品以外にも分析の手をのばすことで、デュラスのインドシナという原風景が新たな形で浮かび上がるのを確認できるのではないかと考える。

INDO-CHINE



图版 1

注

- 1) 芦川智一「マルグリット・デュラスと植民地—『愛人』と『フランス植民地帝国』のあいだ—, 成城大学フランス語フランス文学研究会紀要《AZUR》第6号, 2005年.
- 2) 第1回は, 1933年に開催された. 第2回は, 1940年5月11日に発行された, 雑誌 *L'illustration* の特別号にも特集が組まれている.
- 3) 平野千果子『フランス植民地主義の歴史』人文書院, 2002年, 224ページ.
- 4) *L'illustration*, no. 5071, Paris, Les Bureaux, 1940.
- 5) Philippe Roques Marguerite Donnadieu, *L'Empire français*, Paris, Gallimard, 1940, p. 9.
- 6) 1905年と1911年の2度にわたり, モロッコで起きたフランスとドイツによる国際紛争. この事件により, モロッコがフランスの保護国になった代わりに, 仏領コンゴの一部をドイツに譲渡することになった. またこれにより, フランス国民のなかで帝国意識が高まったとともに, イギリスとの関係が密接なものになった.
- 7) Roques, Donnadieu, *op. cit.*, p. 13.
- 8) Roques, Donnadieu, *op. cit.*, p. 10.
- 9) Marguerite Duras, *L'Eden Cinéma*, Paris, Mercure de France, 1977, p. 125.
- 10) 本ごとに多少異なっているため時期については, 以下の3冊を基とする. Joëlle Pagès-Pindon, *Marguerite Duras*, ellipses, 2012, *Le Monde*, 2012, デュラス特別号, Laure Adler, *Marguerite Duras*, Paris, folio, 1998.
- 11) 『太平洋の防波堤』, 『愛人』, 『北の愛人』の中で, 母親はカンボジアの海辺の町, カンボートの近くに, 貯金をつぎ込んで耕作地を買ったが, 地元の役人に賄賂を払わなければならないという慣例を知らず, 満潮になると塩水が入ってくる, 耕作不能の土地をつかまされてしまった. 一家の悲劇のもととされるエピソードとして描かれている.
- 12) Jean Vallier, *C'était Marguerite Duras*, Tome I, Fayard, 2006, p. 521.
- 13) Vallier I, *op. cit.*, p. 512. アンリ・グルドンは1931年にインドシナ連邦に関する本, 『インドシナ』(Henri Gourdon, *L'Indochine*, Paris, Librairie Larousse, 1931.) を出版している.
- 14) Vallier I, *op. cit.*, p. 332.
- 15) デュラスの以下の伝記では, 大臣ジョルジュ・マンデルとフィリップ・ロックがデュラスの文才を見出したと書かれている. この点に関しては以下の2冊を参照. Laure Adler, *Marguerite Duras.*, Jean Vallier, *op. cit.*
- 16) Vallier I, *op. cit.*, p. 563.
- 17) Marguerite Duras, *Les Impudents*, paris, Plon, 1943.

- 18) 1922年に生まれた反体制派の知識人。学校の教師でもあったが、1980年から政治犯として投獄された。その後の詳細は不明。
- 19) Roques, Donnadieu, *op. cit.*, p. 116-117.
- 20) 中国式の科挙制度は1916年に廃止されたため、この頃のエリート層にはフランス式の教育を受けた者が公務員として多く登用されている。
- 21) Joëlle Pagès-Pindon, *op. cit.*, p. 34.
- 22) 成城大学フランス語フランス文学研究会紀要《AZUR》第6号, 2005年, 131ページ。
- 23) Roques, Donnadieu, *op. cit.*, p. 104.
- 24) Marguerite Duras, *Un barrage contre le Pacifique*, in *Duras Œuvres complètes I*, Paris, Gallimard, 2011, p. 294. 以下同書からの訳は次の邦訳から参照している。マルグリット・デュラス『太平洋の防波堤』田中倫郎訳 集英社, 1979年, 23ページ (一部改訳)。
- 25) *Un barrage contre le Pacifique*, p. 292.
- 26) 『アウトサイド』(*Outside*, 1981)のなかの『痩せた黄色い子供たち』では、マンゴーを食べるデュラスは「汚いアンナン人の子」であり、マンゴーを口にしない母親との間で、アンナン人であったデュラスとフランス人の母親が理解し合えなかったことが書かれている。
- 27) Marguerite Duras, Michelle Porte, *Les Lieux de Marguerite Duras*, Paris, Les Édition de Minuit, 1977. p. 26. 『マルグリット・デュラスの世界』舛田かおり訳 青土社, 1985年, 44ページ (一部改訳)。
- 28) André Malraux, *La Voie royale*, in *Malraux Œuvres complètes I*, Paris, Gallimard, 1989, p. 391.
- 29) Marguerite Duras, *L'Amant*, Minuit, 1984, p. 9. 『愛人』清水徹訳 河出書房新社, 1985年, 5ページ。 (一部改訳)
- 30) *Un barrage contre le Pacifique*, p. 289.
- 31) Roques, Donnadieu, *op. cit.*, p. 108.
- 32) Roques, Donnadieu, *op. cit.*, p. 175.
- 33) *Un barrage contre le Pacifique*, pp. 377-378.
- 34) Albert Londres, *Terre d'ébène*, Paris, Albin Michel, 1929, p. 257.
- 35) *Un barrage contre le Pacifique*, p. 294.
- 36) *Un barrage contre le Pacifique*, p. 470.
- 37) *Un barrage contre le Pacifique*, p. 447.
- 38) Bettina L. Knapp, « Interviews avec Marguerite Duras et Gabriel Cousin », *The French Review*, USA, JSTOR Terms and Conditions, 1971, p. 655.

(図版1) *L'empire français*, pp. 112-113.